

「ロウリー詩篇」小論

— 前期浪漫派への社会史的考察

宇佐美道雄

A SHORT PAPER ON ROWLEY POEMS BY T. CHATTERTON

STUDY OF SOCIAL AND HISTORICAL BACKGROUND OF ENGLISH PRE-ROMANTICS

Michio USAMI

'Rowley Poems' by T. Chatterton is one of the most remarkable works that predicted the coming of 'Romantic Revival' in the middle of 18th century. In this paper, the author, looking into the peculiar nature of 'Rowley Poems' as one of the representative Pre-Romantic works, tried to discuss its social and historical background which could be regarded as one of the original causes by which the Romantic Revival had been brought into the world. The content of the paper can be summarized as follows: 1. In 'Rowley Poems' the conventional and the revolutionary are mixed together and the latter, the very core of which is restoration of the medieval, shows a clear sign of Romantic Revival. 2. The medieval and gothic revival can be found in the middle of 18th century, not only in literary world but in all other cultural fields, and this tendency is a result of the change in general mentality of English society in those days. 3. What causes the change of general mentality is related to political and economical development of the age, and, in this case, one is end of 'Walpole's Age' and the other is collapse of 'Gentry Class'. 4. Such a social change as mentioned above is a result of increase of English production power that went beyond a certain boundary during 18th century.

1767年から1770年にかけて、T. チャタトン⁽¹⁾は、彼のいわゆる「ロウリー詩篇」の大部分を書き上げた。チャタトンが14才から17才のときのことである。この「奇蹟の少年」⁽²⁾は、幼少のころ好んで出入りしたブリストルのレッドクリフ教会に残された古記録から、古い時代の綴り字法、語法、字体などを習得し、それをもとにして、15世紀の僧 T. ロウリーなる人物が書き残したものと偽って、その中世風の作品を世に送ろうと試みたのだった。J. ドズレーとか H. ウォルポールとかの大ものを含め、彼は出版者を求めて、いろいろの人物たちのあいを奔走したが、結果はすべて失敗に終って、1770年の8月、ロンドンの屋根裏部屋に砒素を仰いで、18年のその短い生涯を閉じた。

チャタトンが世に在るあいだ、「ロウリー詩篇」は世間に物議をかます程度以上には出なかったとしても、それが数十年後に現われてくるイギリス浪漫派運動の中核をなす詩人たちに、どれほど大きな影響を及ぼしたかは、およそ測り知れないものがある。⁽³⁾19世紀初頭の浪漫主義者たちが、「ロウリー詩篇」の中に見出した賞讃の対象は、つまるところは、中世という幻夢的な題材、大膽なバラッド風の韻律、若々しく奔放な形象などであったにちがいない。たしかにチャタトンの作品の中には、イギリス浪漫派の特質と完全に一致する諸傾向が、18世紀の中葉、すでにして歴然と存在しており、しかもそれは、詩人自身がなんらの革新的意図に駆られたわけでもなく、きわめて自然に、自己の空想の赴くまま「力

(1) W. ワーズワースが 'Resolution and Independence' の中で T. チャタトンを "marvellous boy" と呼んだ。

(2) ウォッツ・ダントンやトマス・シーコムは、そのチャタトン研究の中で、ワーズワース、コールリッジ、シェリー、キーツ、バイロンなどの作品の中に見られる「ロウリー詩篇」からの語句や韻律の遺影を刻明に調べ、豊富な事例を挙げて、その影響を証明した。なお、コールリッジは16才のときにチャタトンの幼逝を悼む詩を書いたし、キーツは19才のときにチャタトンを憶うソネットを作った。

強い感情を自発的に流路」⁽³⁾させた結果に外ならなかった。だからこれらの作品を、イギリス浪漫派運動の強力な先駆という観点から、高く評価しなければならぬことは、いうまでもない。しかし同時に、これらの作品は、文学史的意義という観点を完全に取り外して、一箇の作品として、純粋に文学的な鑑賞と評価に曝された場合、どれほどまで高い地位を要求できるものか、その点については多分に疑問が残るところでもあろう。因みに、どのチャタトン研究者も「ロウリー詩篇」に関して、詩人の子供くさい未熟さという印象を隠そうとはしないのである。⁽⁴⁾

従って、この論文の中では、「ロウリー詩篇」にたいする文学的鑑賞ないし評価という種類の問題には、全く関心が払われていない。ここで意図されているのは、この作品をイギリス浪漫派運動の源流のひとつとして捉え、それを考察することを通して、18世紀後半における浪漫主義復興という巨大な文学現象の根源的基因の一面に分析を加えようとするにある。それは、「ロウリー詩篇」をひとつの目安として、当時のイギリスにおける文化的社会的背景の変遷を歴史的に考察し、そしてその中に、浪漫主義復興の一つの基因を求めようとするにある。従ってここでは、チャタトンの作品そのものは、その当時の文化史および社会史の変動の過程を見定める里程標のひとつとしての役割りを果たすにすぎないのである。

「ロウリー詩篇」の中に浪漫主義的傾向が顕著に現われているからといって、チャタトン自身が浪漫主義者であったなどと考えるものは、恐らくいまいだろう。ワーズワースが彼らの敵と見なした古典派の詩論を徹底的に攻撃し、新しい浪漫主義の宣言⁽⁴⁾を公けたにすぎずは、チャタトンを含めて、前期浪漫派の詩人一般のあいだにさえ、新しい浪漫主義という明確な意識などは存在していなかった。だから、「ロウリー詩篇」の中には、新しく生れてくるものの胎動が、力強く聞えているのと同じくらい確かに、そこには、当時の文壇にもっとも支配的であった詩風の影響が、歴然と現われてもいるのである。「ロウリー詩篇」に含まれている。ほとんどすべての詩の中に、ジョンソン好みの教訓癖が必ず顔を出してくることは、一読してすぐに理解されることだし、

‘Battle of Hastings’ の278～9行目

He closd hys eyne in everlastynge nyghte;
Ah! what avayld the lyons on his creste!

この二行を、グレイの ‘Progress of Poesy’ およびポーブの ‘Windsor Forest’ に出てくるつぎのような詩行
Closed his eyes in endless night (Gray)

Ah! what avail his glossy varying dyes,
His purple crest. (Pepe)

と比較してみるならば、チャタトンにたいする当時の文壇主流の影響の度合は、おのずから明らかであるだろう。H. リヒターは、‘Battle of Hastings’ の中から、ポーブ訳「イリアッド」とのあいだの parrallel passage だけで11例を提示した。⁽⁵⁾

このようにして「ロウリー詩篇」の中には、当時の文壇に支配的であった因襲的なものと、当時の文壇の目からは異端とも見える斬新なものが、雑然と同居していた一韻律の点でも、素材の点でも、そして形象の点でも。

In VIRGYNE the sweltrie sun gan sheene,
And hotte upon the mees did caste his raie;
The apple rodded from its palie greene,
and the mole pear did bende the leafy sprae;
The peede chelandri sunge the livelong daie;
‘Twas nowe the pride, the manhode of the
yeare,
And eke the ground was dighte in its mose
defte aumere.

Liste! now the thunder’s rattling clymmynge
sound
Cheves slowlie on, and then embollen clangs,
Shakes the hie spyre, and losst, dispendede
drown’d,
Still on the gallard eare of terroure hanges;
The windes are up;the lofty elmen swanges;
Again the levynne and the thunder poures,

(3) ワーズワースの ‘Preface to Lyrical Ballads’ の中にあるよく引用される言葉 “the spontaneous overflow of powerful feeling” を借用した。

(4) 例えばオクスフォード版 ‘The Rowley Poems by Thomas Chatterton’ の第三版の編者 M. E. Hare は、その Editor’s Introduction の中で、「ロウリー詩篇」の中には、当時の文壇に流行であった教訓調の語句が、ひどく幼稚な形でしばしば現われるため、作品を読みにくくしている。また大人たちには目をそむけたくなるような血なまぐさい殺りくの場面の描写が余りにも多すぎるといって、詩人の boyishness と immaturity とを認めている。

(4) 「抒情民謡集」第二版にワーズワースは、浪漫主義の宣言と称せられる序文を載せた。

(5) Helelene Richter: ‘Thomas chatterton’ P. 87 98, Vienna, 1900

And the full cloudes are braste attenes in
stonen showers.

これは「ロウリー詩篇」の中に含まれているチャタンの最後の作品で、その出来柄も最高と見なされている‘An Excellente Balade of Charitie’の第一連と第六連であるが、このような奇妙な綴り字と語法のショーサー風7行連が、中世式の筆写体で羊皮紙に書かれていた図を想像すれば、「ロウリー詩篇」の異様さも、ほぼ推察がつこうというものだ。第一連に見られる語法と形象は、明かに18世紀古典派の格式に測った端正なものだ。それに比して、第六連においては、修辞法そのものは、第一連と同様の性格をもっているにせよ、形象という点では、全く異質のものである。こういう荒々しい形象を、古典派は忌避する。それは、当時の通有の概念からすれば、grotesqueでありbarbaricであった。かくして「ロウリー詩篇」の中には、形象ひとつを捉えてみても、正格と異端が入り混っているのだが、しかしここで再び留意しておきたいことは、チャタンは、擬古典主義全盛の時代にあつて、中世に題材を求めた、このような荒々しいエネルギーを感じさせる調べを混入させるに当つて、決して何らの革新的意図など持っていないかたということだ。詩人は、自己の感性の赴くままに、おのずから湧き上る想像力にまかせて書き綴った結果、こういう風になったということである。

ギリシャとラテンを規範と仰ぐ古典派の目からすれば、中世はすなわちゴシックであり、そしてそれは、醜悪と野蛮の別名でもあつた。だからチャタンは、その作品を15世紀の遺稿と偽つて世に送ろうとしたわけだが、この論文の中で問題にしようとしていることは、そのような時代にあつて、ブリストル生れの一少年詩人に、如何にして、中世への関心が生じたかということと密接に関係がある。「ロウリー詩篇」の中の韻律や形象の新らしさというものは、畢竟、この中世的なものの再興ということと源を同じくする、同一の範疇に属する現象であり、そして、中世への憧憬とゴシックの復活と

は、浪漫主義復興の強力な源泉のひとつとなつたからである。たしかにチャタンは、ブリストルというロンドン中心の都会生活とは無縁な田舎に育つて、原始の力に溢れた自然と親しむ一方、彼の一族が代々関係してきたレッドクリフ教会のゴチック寺院に、子供のころから出入りして、⁽⁶⁾その早熟な空想力を満たし養うに都合のよい環境にあつた。しかし、そういう純粹に個人的な問題を別にして、ここでは、その時代全体の背景の中に中世復興の基因を考えなければならない。

「ロウリー詩篇」が贋物が本物かという、いわゆるRowley Controversyは、マクファーソンのOssian Controversy⁽⁷⁾と並んで、18世紀を通じての有名な論争のひとつとなつたが、そういえば、18世紀の中ごろには、同じような出来事がたくさんあつた。H.ウォールポールの「オトランドの城」⁽⁸⁾などもそのよい一例であるが、この種の問題を少し掘り下げてみるならば、それは、T.グレイの‘The Bard’, ‘The Descent of Odin’⁽⁹⁾ R.ドズレーの‘A Select Collection of Old English Plays’さらにT.パーシーの「古謡拾遺集」などを著しい代表とする古文学復活の潮流と密接に係わりあつてゐることが理解されるだろう。要するにそれは、ギリシャとローマを規範と仰ぐ古典の世界からは、異端と目されるべきもの、ゴート的なもの、原始的なもの、古くて地方的なものへの関心であり、そしてその発掘であつたのだ。

「ロウリー詩篇」を含めて、18世紀の中ごろに見られたこのような古文学への関心あるいは中世文学の発掘という一種の幅広い文学上の流行現象を想定する場合、それと関係ある同じ種類の現象として頭に浮ぶものは、やはり同じ時代に見られたゴチック・リバイバルというさらに幅広い文化史的潮流であるだろう。H.ウォールポールが、ストロベリー・ヒルにゴチック式建築の模倣物を建てた話しは有名だが、⁽¹⁰⁾ゴチック・リバイバルは、18世紀の中ごろから急にはやり出したこれら建築および造園についてのみにいわれるべきものではなくて、書籍

(6) タチャトンの家は、先祖代々レッドクリフ教会の寺男を勤め、詩人の代には、父親が学校教師となつたため、叔父さんが教会に勤めていた。その関係で詩人は絶えず教会内に入りし、その記録保管室は、彼の最上の慰安場所となつた。

(7) J. マクファーソンは、1760年から63年にかけて、ゲールの詩人オシアン原作と称する3篇の詩を、古風な散文詩に訳して出版したが、その真贋をめぐる激しい論争が行われた。

(8) 「ロウリー詩篇」を贋物と見て、チャタンからの再三の依頼にもかかわらず、その出版を拒絶し、チャタン自殺の一因ともなつたホレイス・ウォールポール自身が、イタリア人ムルトーの原作、W. マーシャルなるイギリス人が訳したものと称して、「オトランドの城」を1765年に出版した。この作品は、そのころ大へんな人気を博し、ゴチック小説のはじまりとなつた。

(9) 前者はケルトの伝説をもとにしたもので、1757年に、後者は北歐の伝説を材料としたもので1768年に、それぞれ出版された。

(10) 「1747年ウォールポールはストロベリー・ヒルの別荘を買いて、銃眼つきの胸壁を設け、尖塔を建て、窓穴をうがち、天井を丸天井にし、曲線模様のはざま飾りを施し、着色ガラスをはめ、いく組かの物の具をならべ、ゴチック様式の本箱をならべた。古城に改装したというわけである。」研究社英米文学史講座、第6巻、92頁

絵画、装飾品、その他古物一般にたいする収集や研究を含めた、もっと広汎な、ゴシック時代への愛着心復興の風潮を指すものでなければならぬだろう。

つまり、ウォルポールが、その別荘に中世の古城を作ったり、バサースト卿がその私園に、ゴシックの廃墟まがいの建築物を建てたりした一方では、ウッドワード博士が、古代の楯とか古器物とかを収集し、⁽¹¹⁾ スロウン卿がその召使い J. ソールターと共に一種の博物館を開設し、⁽¹²⁾ また、T. ハーンが古い記録の研究に没頭して、⁽¹³⁾ 英国年代記を出版するという具合であったのだ。勿論これらの風潮を、あまり真険に考えるわけにはいかないかもしれない。それは、趣味の変化か、流行の移り変わり、あるいは、ごく初期においては、上流階級の物好き程度のものであったのかも分らない。しかし、何かが起こりつつあったことは確かだ。とにかく、ひとつとは未開と野蛮の名残りを目ざれていたゴシック式の廃墟に、新しい美しさを発見し、自国の歴史に新しい興味を見出し、そして、中世を舞台にした伝奇物語に熱狂的な歓迎を示すようになったのだ。「ロウリー詩篇」を生み出した基因のひとつは、こうしてゴシック・リビイバルという文化史的観点から捉えることも可能なものであり、また逆に、チャタトンの作品は、そうした当時の文化的変動を見定める有力な指標のひとつともなり得るのである。

18世紀の中ごろから俄かに顕著となった、文学および芸術一般におけるゴシック復活熱というものは、それ自体としては、大した成果を挙げなかった一時の気まぐれの現象にすぎなかったかもしれないけれども、それにしても、やはりその背後に大きな必然性が横たわっていたのだし、そしてその結果は、極めて重要だったのだ。

だ。それは、従来のごとく、均整を重んじ、知的洗練を尊び、法則的単純さを喜ぶという意識ないし心的態度が破たんを来たし、不規則かつ複雑で、力強いものに心を惹かれるという状態が現出してきたことを意味した。つまり、ゴシック復活熱とは、18世紀前半のイギリスを代表していたメンタリティーが崩壊しかけて、それにとって代わるべき新しいメンタリティーが生まれつつあったことのひとつの現われだったのである。

18世紀前半すなわち啓蒙期の知識人にとって、彼らの生きている時代は、人類の到達しうる最高の状態であったし、「彼らの自己陶醉にくらべれば、ヴィクトリア時代人の有名な自己陶醉も謙譲そのものであった」⁽¹⁴⁾ といえるほどだったのだ。それは、合理主義、理神論、古典主義全盛の時代、理性の力の楽天的に信奉された時代だった。彼らは、社会に関しても、人間に関しても、単純明快な機械論をもって割切った。だがやがて彼らも、「自分たちの慣れ親しんでいる社会状態と思考方法が、絶えず移り変わる万華鏡の東の間の一面にすぎないこと」⁽¹⁵⁾ を知るようになる。社会についても、人間についても、彼らが自然の状態と見なしたものが、決して彼らの考えるように固定的、画一的なものではなくて、はるかに流動的、有機的なものであると思知らされるようになるのだ。ヒュームの懐疑主義は、哲学における「18世紀合理主義の破産」⁽¹⁶⁾ を、バトラーの「比論」⁽¹⁷⁾ は、理神論の敗退を、クーパーやコリンズやスマートたちの不幸な生涯⁽¹⁸⁾ は、古典主義の末期的苦悩を、それぞれ明らさまに表現した。こういうまでもなく、この種の崩壊過程というものは、時の経過につれて、それ自身の内部にはらまれていた矛盾が、除々に明確な形をとって現われてくることによって、もたらされるものであるが、

- (11) J. ウッドワード (165~1728) は、珍しい古物を収集する一方、化石の収集にも熱心で、ケンブリッジ大学にはじめて地質学の教職を設け、今日の「ウッドワーディアン博物館」の基礎を置いた。
- (12) ハンス・スロウン卿 (1660~1753) は、医師で王室学会の総裁を15年間にわたって勤め、チェルシー植物園を開いたし、その召例いジェイムズ・ソールターは、主人の供をして海外を旅行するかわら、珍品を収集し、「ドン・サルテロの博物館」を作った。そこには、スティールの言葉を借りると、「一万に及ぶごまかしものが並んでいて、支那から持ってきた化石の蟹、ボンチャラス・パイラットの妻の侍女の妹の帽子があった。」この収集品は、大英博物館の基礎となった。
- (13) トマス・ハーン (1678~1735) は18世紀における英国史研究に重要な役割りを果し、英文学史、英詩史の編纂にも大きな貢献をなした。
- (14) G. M. トレヴェリアン「英国社会史」(林健太郎訳)第2巻, 219頁, 山川出版社, 昭和25年。
- (15) 同上 218 頁。
- (16) B. ラッセル 'A History of Western Philosophy' P. 698, George Allen and Unwin 1946.
- (17) J. バトラー (1692~1752) の「比論」(The Analogical of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and Course of Nature, 1736) は、キリスト教擁護のための論で、いわゆる自然神教の考えにたいして、啓示宗教たるキリスト教の来世、諸奇蹟、諸啓示、その他宗教上の教義の信すべきことを説いたものである。それは当時の読書界に多大の感銘を与えた書物であった。
- (18) チャタトンもそうであるが、これら前期浪漫派の詩人たちには、発狂して癲狂院で暮したり、早死したりするものが多かった。

とにかく、18世紀前半のイギリスを支配した、思想上、宗教上、芸術上にわたる、ある統一的傾向が、そのひとつの終局に達し、そしてそこに、不規則なもの、力強いものを待望するような新たな心的態度の芽える素地を培養したのである。そしてゴチック・リバイバルという文化史上の現象も、その誘因の基盤は、実にここに根ざしていたと考えられるのである。

半世紀を単位として考えられるような、精神文化の上の大きな変動 — 思想から論理から美意識までを包含する幅広い心的態度の変化というものは、当然、そういう変化を醸し出す母胎となった、その社会全般にまたがる諸々の社会的現象 — 政治、経済、その他一般の動向 — とのあいだに、なにほどこかの相関関係が見出されねばならない。前述の啓蒙期におけるメンタリティーの崩壊過程の場合には、政治の面では「ウォールポール時代」⁽¹⁹⁾の終焉が、経済の面では、「ジェントリー階級の消滅」⁽²⁰⁾が、それぞれ照応している。

ウォールポール失墜の直接の原因は、国内的には、選挙法の不合理からくる議会対策の行き詰まり、対外的には、イギリスの海外進出に伴って生ずる和平政策の行き詰まり、この二者に帰することができるだろう。名誉革命の後、政権の中心は議会に移ったけれども、実際に選挙権を所有するものは国民の50分の1にすぎず、⁽²¹⁾しかも選出される議員そのものは、実質において地方貴族の任命によるものが多かったから、⁽²²⁾ウォールポールの国会議員にたいする買収工作や妥協工作が成功している限りは、大平無事を謳歌することができたけれども、時代の推移につれて、民意を代表しない議会政治の在り方には、強い批判が加えられるようになった。アンジャン・レジームを象徴するウォールポールが1742年に失脚し、

選挙法改正を宣言したピットが1756年に内閣を組織した。18世紀が後半に進むに従って、ますます活況化した政治上の諸紛争 — ジョン・ウィルクス事件⁽²³⁾ ジュニアスの事件⁽²⁴⁾ ジョージ・ゴードン事件⁽²⁵⁾ 等は、すべて議会が民意を反映しなくなったという当時の政治的趨勢を物語る泡沫的現象にすぎない。

一方、各種の保護条令を施行することによって国内各層の不満を柔げながら、他国との紛争を極力避けようとするウォールポールの和平政策は、次第に富を蓄積して海外進出と植民地経営という積極政策を旗印しにする急進派の進出に押されて、ようやく終局を迎えはじめた。自由貿易と放任経済を唱えるアダム・スミスの出現は、ウォールポール外交の時代遅れになったことを如実に物語ったが、ウォールポールの失脚とオーストリア継承戦へのイギリスの参戦は時を同じくしたし、また、ピットの組閣と七年戦役の開始は同時に起ったのだった。まことにウォールポールの終焉とピットの出現は、ひとつの時代からつぎの時代への転移の過程を、あざやかに象徴した。それは、人為的、都会的、虚礼と形式を重んずる文化人の世界が崩れて、そこに粗野で好戦的なブリトン人が、その素顔をのぞかせはじめたように見受けられた。因みに、その半世紀後、インド成金の後継い、若冠25才の小ピットが内閣を組織して、ナポレオン戦争を戦い抜いたとき、そこにイギリス浪漫主義文学の精華が開花したのではなかったか。

ところで、このような政界に見られた変化に呼応して、この当時の経済界の中にも、やはりそれに応じた重大な変化が起りはじめていた。その変化は、結局は、産業革命を招来するための準備段階であったと考えられるのであるが、とにかく、17世紀の革命を遂行する推進力

- 19) 18世紀前半の約20年間、イギリス政界を牛耳った R. ウォールポールは、チャタトンと関係のあった H. ウォールポールの父で、たくみな議会工作と、和平政策とによって、「ウォールポール時代」と呼ばれる平和な時代を作った。
- 20) ここにいうジェントリーとは、独立自営農を中核とする地方の中小地主、および主として貿易業にたずさわる初期商業資本家たちを含めた総称で、17世紀の二つの革命を遂行する中心勢力の役割りを果たし、18世紀初頭の議会主義を確立した市民社会の中核部であったが、この世紀の半ばごろからその上下への分離傾向が顕著になって、やがて資本家階級と労働者階級へと転化した。
- 21) 「1768年にイギリスの総人口は約800万であったが、そのうち選挙権を有するものは16万人にすぎなかった」。今井登志喜「英国社会史」下巻15頁、東大出版会、昭和34年。
- 22) 「指名選挙区 (nomination borough) の中には、一人の貴族で10名くらいも議員を指名したものがあつた」同上。
- 23) ジョン・ウィルクスは、1762年に小新聞を発行して、政治の批判を行った。批判の内容は下品なものであったが、民衆のあいだに猛烈な人気を呼んで、1774年にはロンドン市長に選ばれた。
- 24) ジュニアスなる匿名の人物が、1768～72年に、パブリック・アドヴァタイザーなる新聞紙上で政府攻撃の暴露記事を連載したところ、政府は出版者を逮捕して裁判にかけたが、裁判官は名目的な処罰をするに止めた。
- 25) 1780年ロンドンのセント・ジョージ広場に、G. ゴードンを首領と仰ぐ約2万の会衆が反政府集会を開き、そのあと暴徒と化したこれら会衆が、5日間にわたって町中を掠奪し、ロンドンをほとんど無政府状態と化せしめた。

ともりな、かつ18世紀初頭の市民社会を形成する中核体ともなったジェントリー階級が、世紀の半ばごろから著しくその分裂傾向を強め、実質的には、その世紀の終らないうちに、雲散霧消の形をとるに至ったということである。ここにいうジェントリー階級という概念は、①大貴族より下層にしてヨーマンより上層の地主、②法律家僧侶、医者のごとき上流職業人、③主として貿易業に従事する富裕な商人、以上三者の総体と呼ぶもので、⁽²⁶⁾それは16世紀後半からひとつの社会的階級として成立し、18世紀の後半に入って消滅したものである。

この階級も、その成立の過程においては、二つの革命を通じて、宮廷を中心とする貴族・大地主の階級から、その政治的および経済的支配権を奪い、より広い階級のひとびとの地位を向上させるという進歩的役割りを果たしたわけであったが、その終末期においては、みずから富と権力をますます増大させようとする上層と、そのために一層下に転落していく下層とに分離し、そして前者は、人口の増大に伴って著しくその数を増してきた下層民を抑圧して、自己自身の増殖を計ろうとする、いわゆる反動的性格を帯びるに至ったのだ。そしてこれら二者が、それぞれ資本家階級および労働者階級という近代的な形をとって現われたとき、そこに産業革命が達成されたのであった。18世紀の中ごろは、ちょうどこのジェントリーの崩壊が決定的な段階にさしかかった時期に当っており、それはウォルポール時代の終焉という政治上の推移、また、18世紀的ジェントルマン社会の文化的傾向の凋落という社会全般にまたがる諸現象と符合していた。

合理主義、理神論、古典主義等によって端的に表現される、いわゆる啓蒙期の文化的諸傾向が一応その終末を迎え、「ロウリー詩篇」をも含めて、ゴチック的なものの復活が歓迎されるような時代が到来したということは、その究極の基因を求めれば、ひとつの時代を代表し、その時代の一般的メンタリティーを決定する階級、つまりその時代のブルジョアジー—この場合ジェントリー階級—が質的に変化したという歴史的事実の中に求められるわけである。そのようなブルジョワジーの質的転換をもたらしたものは何であったか、つまり、その時代にその社会の下部構造の中に、どのような変動が起った

かが、つぎの問題となるであろう。

ブルジョワジーの変質を考察するためには、当然その社会の生産力と生産関係の総体的変動を調べなければならないだろうが、ここでは、それらの考察の対象を生産人口、生産技術、生産高の三者に限定したいと思う。生産力とは、労働、労働手段、労働対象の三者を総合した概念に外ならず、それらの概念が、具体物として発現する場合、大まかには、生産人口と生産技術と生産資源（生産高と比例関係にある）という形をとると考えることは、ほぼ間違っていないからである。

唯物史観においては、生産力という概念は、あらゆる社会的現象とその変動の最後の基因と考えられ、しかもそれは絶えず連続的に増大するものとされている。そしてその生産力を構成する三つの概念のうちでは、労働手段が、労働と労働対象の変動に優先するものと規定されている。事実、18世紀の英国においては、「イングランドとウェールズの人口は、アン女王即位時の550万から1801年の900万にまで増加した」⁽²⁷⁾し、「18世紀が経過する間に、イギリスの鉄と石炭の生産高は200倍を越え、木綿の輸出高は400倍、小麦と大麦の生産高は、それぞれ1エーカー当り1.6倍に達した」⁽²⁸⁾といわれるけれども、これら二者の増大は、生産技術の継続的变化という要素と、複雑に絡りあって、それぞれ原因となり結果となりあいながらも、最終的には、着実に絶えず進化していく生産技術の増大に負うていると考えられるのである。トレヴェリアンの「英国社会史」は、1700年から1840年に至る間の英国の出産率と死亡率を表わす、興味深いグラフを載せているが、⁽²⁹⁾イギリスの人口は「18世紀の最初の10年間に、死亡率は急激な上昇を示し、出産率を超過した。しかし、この危険な傾向も1730年から1760までの間に逆転し、1780年以後、死亡率はほとんど拍子に減退した」⁽³⁰⁾のだった。そしてこのような生産人口の増加は、他の社会的因子と有機的に絡りあってもたらされたことは勿論としても、その最も根底的な誘因は、衛生と医療の技術的進歩という、生産技術上の因子に帰せらるべきものでなければならぬ。18世紀の中頃、モンタギュー夫人がロンドンに種痘病院を設立し、⁽³¹⁾ハンター兄弟が外科医学を改善し、⁽³²⁾スメリー

⁽²⁶⁾ このジェントリーの定義は、角山栄「資本主義の成立過程」（ミネルヴァ書房、昭和31年）の中で採用されているもので、R. H. Tawneyが「The Rise of the Gentry」なる論文の中で規定したものである。

⁽²⁷⁾ G. M. トレヴェリアン「英国社会史」第2巻、220頁。

⁽²⁸⁾ A. トインビー「英国産業革命史」（塚谷晃弘・永田正臣訳）邦光書房、昭和33年。

⁽²⁹⁾ G. M. トレヴェリアン「英国社会史」第2巻、222頁。

⁽³⁰⁾ 同上 212頁。

⁽³¹⁾ 婦人旅行家M. W. モンタギュー夫人は、トルコから種痘を伝え、ジエンナーのワクチン発見の基因となった。

⁽³²⁾ 兄のウィリアムは解剖学者で内科医、弟のジョンは、同じく解剖学学者で外科医、ともにスコットランドからロンドンに来て医学教育に従事し、外科医学を改善した。

が産婆術に変革をもたらし、⁽³³⁾ コーラムが初めて育児院を開設し、⁽³⁴⁾ そしてさらに、「産科病院が主要都市に創設され、あらゆる種類の患者を収容する州病院も開かれた。首都では1720年から1745年に至る間に、ガイ、ウェストミンスター、聖ジョージ、ロンドン、ミドルセックスの各病院が創設された。1700年以後125年間に、大ブリテンに新たに設立された病院および施薬所の数は154を下らない」⁽³⁵⁾ という。これらの事実は、この時期におけるイギリス生産人口の上昇に直接貢献したものであり、これがさらに各種物資生産高の急激な上昇と相俟って、社会全般を変革させるに足るほどの「生産諸力」の増大を形成したのであった。

農業においては、18世紀の初期までは、農器具の点でも、農耕法の点でも、ほとんど太古と変らない仕方によって営まれていたが、この世紀の進むにつれて、排水、条播、施肥、家畜の種附および飼育、道路建設、農場家屋の改築等、万般にわたる農業技術上の変革によって、いわゆる「農業革命」が達成され、そしてそれは、18世紀後半から顕著になった「産業革命」の有力な一翼を擔ったのだった。この農耕技術の進歩は、必然的に農業生産高の急激な上昇を招き、それと同時に、農村における生産関係の中に一大変動を引き起し、それは「困込み」の急増となって現われた。新しい農業は、従来イギリス村落の中核を形作っていた小規模の独立自営農という形態には適応しなくなり、共有地や下層農民の農地をつぎつぎに困込んで、大規模な農園を経営する方向へ切り替った。A. トインビーは、産業革命期において、約半世紀のあいだに、実に700万エーカーに及ぶ農地が困込まれたことを明らかにしたが、これは、名誉革命以後、新たに富力を加えた一部の上流郷土層と、貿易によって巨大な資本を蓄えた新興商人層とが、その資本を農地に投下することによって、新しい農場経営に活潑に乗り出してきたことを意味した。新しい農業技術の採用が、新しい困込み農園の大型化に一層の拍車をかけ、木綿、羊毛、穀物類の生産高は、飛躍的に増加した。そして従来のごとき農村の自給自定体制は消滅して、農園所有者とそこに働く賃金労働者という、資本主義的生産関係がそれにとって代った。

困込みの進捗につれて、つぎつぎに農地を奪われていく下層農民たちを受入れたものは、都会地に発生しつつあった新興製造業者たちであった。18世紀後半の約50年間に、リヴァプールの人口は10倍に、マンチェスターは5倍に、パーミンガムは7倍に、チャタンの生れたブ

リストルも3倍に、それぞれ人口増加を見たのだった。それまで農村の手工業に頼っていた織物業は、木綿や羊毛の増産に伴って、都市資本家による工場生産へと移り変って、ここにも新しい資本主義様式が生産関係が見られるようになった。ハーグリーブズ(64年)、アークライト(69年)、カートライト(85年)による新紡織機の発明は、イギリス織物業の歴史における画期的事件であったが、エンジンを応用したカートライトの機械においては、以前一機で6ポンド紡いだものを、実に一機で1000ポンドも紡ぐようになったのだった。一方、1760年に至って完成されたダービー父子による溶鉱炉の発明は、排水ポンプの改良による石炭の増産と相俟って、鉄の生産高を飛躍的に増大させ、都市における各種製造業を急速に発展させていった。

ワットの蒸汽機関の発明は、産業革命を決定的なものにしたが、その他、マンチェスターからリヴァプールに至る水路の開設(1761~66年)、イングランド・バンクによる銀行券の発行(1769年)、ロンドン手形交換所の創設(1775年)等は、すべて新しい生産関係の時代の到来したことを声高に告げた。

イギリスの歴史の中で、最初に著しい生産力の増大が見られるのは、16世紀後半のエリザ朝においてであるが、その結果は、それまでの封建的諸制度が、生産力の増大を阻害しはじめ、新しい市民階級の社会を作り出す素地を形生した。新興ブルジョワジーによる社会的諸制度は、当分の間は、生産力の順調な発展に貢献したけれども、18世紀に入って、それは再び急速な生産力の膨脹にとって桎梏となりはじめた。従って18世紀の中葉は、ひとつの社会形態が、つぎの社会形態に進むための過渡期に当たっている。生産技術の進歩、生産人口の増大、生産資源の拡充—生産力の増加—は、農村における独立自営農中心の自給自足的生産関係、および、都市における家内手工業的生産関係を破壊し、資本主義的な新しい生産関係を招来した。18世紀初頭のイギリス社会を担っていたジェントリー階級は、少数の上層と多数の下層に分裂を起し、その結果、上品な紳士の世界が崩壊して、どん態な資本家階級と戦斗的な労働者階級の世界が現出したのだ。その変化が政治に反映しては、前述のごとく、ウォルポール時代によって象徴される、融和と折衷を旨とする和平政策、統一と規制を計る保護政策の時代が終って、ピットの出現が雄弁に特語るように、自由と積極の急進政策的時代が到来したのだった。

経済において自由競争主義が唱えられ、外文におい

⁽³³⁾ W. スメリーもスコットランド人で、ロンドンで初めて近代的な産婆術を公開した。

⁽³⁴⁾ T. コーラムは親切な船乗りで、育児院開設を説いて廻わり、ついにジョージ二世から特許状を貰い、各界の名士からの奇附等によって1745年ロンドンに育児院を開設して、公衆の福祉増進に貢献した。

⁽³⁵⁾ G. M. トレヴェリアン「英国社会史」第2巻、227頁。

て、海外伸長政策がとられるようになったということは、つまり、ジュントリー階級の時代が経過する過程において、イギリスの生産力が着実に発展し、その結果、新しい時代を迎えざるを得ないまでに、その国力が増進したことを意味した。18世紀の経過する間に、農業上および商工業上の発展によって、それまで古典的な静けさの中にあったイギリスの各地方都市に、新しい産業の中心が生まれ、それぞれが独自の文化を主唱する幾つかの地方的文化の中心地と化した。それはイギリス人全体の平均的生活水準が上昇して、イギリス文化層の幅が拡大されたこと、また、その速度が他のヨーロッパ諸国に比してはるかに高かったため、国富の点で、他のいかなる国にも打ち負かされることのないまでに、国際競争力が強まったことを意味した。経済と政治の分野において、従来の保護の規定や法令が次第に束縛と感じられ、海外貿易や植民地経営の点で、戦斗的な伸長政策が歓迎されるようになっていったのに呼応して、精神文化の面においても、合理主義、理論、古典主義に見られる、ある一貫した文化的傾向が社会の関心を惹かなくなり、代って新しいエネルギーに満ちた文化的傾向—自国に固有の古いもの、地方的なもの、より自由で奔放なものへの興味が広がっていった。繰り返していうが、18世紀に入って、イギリスの生産力の膨脹が一定の段階に達した結果従来の生産関係が、もはやそのままの状態を維持することに堪えられなくなり、そしてその社会の中核を支えていたブルジョワ階級が変質を余儀なくされたのだった。18世紀以後、イギリスの各地方に文化が滲透し、教育が普及し、読者層の幅が広がって、精神文化の上に大きな変化を生じたのも、結局はすべてここに起因したのだった。

まことに文学というものは、その作者自身の好むと好まざるとにかかわらず、彼の生きていた時代を雄弁に物語る。時代が作者のペンを通して語りかけるといっても

よい。それは、いかに反社会的な作家にあっても、それなりにそうなのだ。国力の増進は、自国の力の認識を通して、自国固有の古いもの、この場合、活力に溢れたブリトニックなもの、粗野で力強いゴシック的なものへの愛着心を呼び起すのだ。国民的生活水準の向上は、文化に浴する民衆の幅を広げて、より広汎にして、より自由、より素朴に、より自然に、より豊かに、その関心の対象を広げたのだ。産業革命の進行と共に開花したイギリス浪漫派文学成立の基因のひとつは、たしかにここにある。チャタトン文学が真に意味するものも、ここにある。

参考および引用書目

- 'The Rowley Poems by T. Chatterton' Ed. by M. E. Hare, Oxford at the Clarendon Press, 1911
 E. H. W. Meyerstein: 'A Life of T. Chatterton', Ingpen and Grant London, 1930
 J. C. Nevill: 'Thomas Chatterton', Frederick Muller London, 1948
 'Cambridge History of English Literature', Cambridge Univ. Press, 1936
 L. Stephen: 'English Literature and Society in the 18th Century', Duckworth, 1940
 G. M. Trevelyan: 'English Social History' Longmans 1946
 A. Toynbee: 'The Industrial Revolution', 1884
 川村泉: 「チャタトン」英米文学評伝叢書28巻, 研究社, 昭和10年
 英米文学史講座18世Ⅰ, Ⅱ 研究社, 昭和36年
 今井登志喜: 「英国社会史」東京大学出版会, 昭和134年
 角山栄: 「資本主義の成立過程」ミネルヴァ書房, 昭和34年